

文字タイプの操作と日英語間の翻訳

―村上春樹作品と『ハックルベリー・フィンの冒けん』から考える―*

山木戸浩子

1 はじめに

村上春樹によって書かれた（超）短編小説に「夜のくもざる」（1995）がある。以下（1）に冒頭の部分を引用する。

- (1) 夜中の二時に私が机に向かって書き物をしていると、窓をこじあけるようにしてくもざるが入ってきた。

「やや、君は誰だ？」と私は尋ねた。

「やや、君は誰だ？」とくもざるは言った。 (p. 104)

これ以降も「くもざる」は「私」が言ったことを真似して繰り返すのであるが、「私」と「くもざる」とのやり取りの中で文字タイプが意識的に書き分けられている箇所がある。(1)の続きを見てみよう。

- (2) 「真似をするんじゃない」と私は言った。

「真似をするんじゃない」とくもざるは言った。

「マネヲスルルンジャナイ」と私も真似をして言った。

「マネヲスルルンジャナイ」とくもざるもカタカナで真似をして言っ

* 本稿を書くにあたり、Philip Gabriel 氏に大変貴重な情報をいただいた。金水敏氏には本稿の一部について有益なコメントやご助言をいただいた。また、本稿のテーマの着想を得たのは、Timothy Vance 氏に世界の文字システムの面白さについてお教えいただいたからこそである。この三名の先生方に心より感謝の意を表したい。本稿の一部を役割語研究会（大阪大学文学研究科主催；2017年11月、2019年3月）で発表した際に質問やコメントをくださった研究会のメンバーの皆さまにもお礼を申し上げる。

た。

まったく面倒なことになったなと私は思った。物真似狂の夜のくもざるにつかまると、きりがなくなってしまうのだ。どこかでこいつを突き放さなくてはならない。私にはどうしても明日の朝までに仕上げなくてはならない仕事があるのだ。こんなことをいつまでも続けているわけにはいかない。[…]

(pp. 104-105)

(2) における「私」の最初の「真似をするんじゃない」は、くもざるに向けられた真似を禁止する発話であり、ここではごく標準的に漢字とひらがなが混在して書かれている。これに対して、くもざるも「真似をするんじゃない」と、「私」が言ったことを真似して言う。次に、「私」は「マネヲスルルンジャナイ」と、「する」にアレンジを加え、「スルル」(傍点は引用者による)と変えて言ってみせるが、くもざるは再びそれをそっくりそのまま一字一句違わずに真似をして退けるのである。ここで注目すべきは、この「私」の文全体がカタカナで書かれているという点である。また、「私」とくもざるのやり取りは口頭で行われているのにも拘らず、「くもざるもカタカナで真似をして言った」(波線は引用者による)とさえ書かれている。それでは、なぜ「私」の「マネヲスルルンジャナイ」がカタカナで表記されているのかと言うと、この文は(一つ前の「真似をするんじゃない」を元に作られてはいるものの)もはや言内の意味を持っていないからであろう。それは、「する」が「スルル」と変えられ、言葉遊びの要素を含んでいるところにも表れている。また、発話全体がカタカナで表記されていることによって、例えばプログラミングされたロボットが(意思を持たずに)話しているような、どこことなく機械的な印象を与える。

日本語の書き言葉には、ひらがな・カタカナ・漢字の三つの文字タイプが存在し、例えば名詞には漢字、助詞にはひらがな、外来語にはカタカナといったように、品詞や語源によってどの文字タイプで表記するかが概ね決められている。一方、上の例で見たように、特定の文字タイプを変則的

に使用することによって、音では表しえない意味を視覚的に表現し、特殊な効果をもたらすことができる。金水（2018）は、変則的な文字タイプの使用の中でも特に「普通は漢字で表記される語を片仮名（および平仮名）で表記する」用法について論じている。「話し手がその表現の意味を理解しないまま（あるいは用字を知らないまま）口移しのように音声を発している」、あるいは「相手の言った単語が聞き手に十分理解できず、適切な字を思い浮かべることができなかった」という状況が想定され（p. 51）、そういった「話し手の理解という目に見えない状態」が「文字種の操作」によって表現されていると言う（p. 52）。また、漢字に代わって使用されるのがひらがな・カタカナのどちらかによって、与えられる印象が異なることも指摘する（例えば、ひらがなは初学者、カタカナは外国人のイメージなど）。

実は日本語のように3つの文字タイプを持つ言語は珍しく、これが日本語の文字システムが「世界でもっとも複雑である」（Sproat 2000; Dobrovolsky and O'Grady 2005; Rogers 2005; Robinson 2007）と言われる所以でもあるのだが、一方で英語のように1つの文字タイプしか持たない言語は多い（英語の場合はアルファベット文字）。それでは、日本語で書かれた文学作品などが英語に翻訳される際、3つの文字タイプ間での操作によって生じる視覚的な表現はどのように対応されるのであろうか。あるいは、逆に英語から日本語への翻訳において、翻訳者によっては日本語の文字システムの特徴を生かし、意図して変則的な文字タイプを使用することはあるのか。もしそうであれば、どの文字タイプがどのような要素を表現するために使用されるのであろうか。本稿では、文字タイプの操作による効果について考え、その効果が日本語・英語の二言語間の翻訳においてどのように生かされるのかについて論じる。日本語から英語への翻訳のケーススタディとして、村上春樹（著）の長編小説『海辺のカフカ』（2002）（*Kafka on the Shore* (2005) (Philip Gabriel, Trans.)) に登場する「ナカタさん」、そして『1Q84』（2009, 2010）（*1Q84* (2011) (Jay Rubin and

Philip Gabriel, Trans.)) に登場する「ふかえり」の話し言葉を分析する¹。また、英語から日本語への翻訳は、Mark Twain (著) *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) に登場する主人公 Huck の話し言葉を分析する。この作品の日本語翻訳は複数出版されているが、柴田元幸(訳)『ハックルベリー・フィンの冒けん』(2017) を中心とする。ふかえりの話し言葉に見られる特徴的な表記の英語翻訳については、『1Q84』の翻訳者の一人である Philip Gabriel 氏へのインタビューも紹介する(2019年3月9日、10日私信)。

2 日本語と英語の文字システム

日本語の文字システムには、漢字・ひらがな・カタカナの3つの文字タイプが存在する。漢字は1文字が1語(あるいは1形態素)を表す「表語文字(logogram)」体系に属し、仮名(ひらがな・カタカナ)は1文字が音的要素(1音素、1音節など)を表す「表音文字(phonogram)」体系に属する²(Rogers 2005)。仮名は1字1字が(意味とは関係なく)単に音を表しているにすぎないため、日本語を全て仮名で(ひらがな・カタカナのどちらでも)書くことも可能であるが、現代日本語においては漢字と仮名が混ざって書かれるのが典型である。書き手が好んで仮名を多く使うこともあるだろうが、もしそうでなければ、「書き手に教養がない」「読みの対象が子どもや外国人である」などの印象を与えうる。以下(3)に、それぞれの文字タイプの使用の例を挙げる(Dobrovolsky and O'Grady 2005; Rogers 2005)。

1 「夜のくもざる」は、2019年10月25日現在、英語翻訳されていない。

2 仮名は、表音文字体系の中でも特に1文字が1音節を表す「音節文字(syllabogram)」体系、より厳密には、1文字が1モーラを表す「モーラ文字体系(moraic writing system)」を持つと考えられている(Rogers 2005, p. 14) (e.g., 「きっさ」[kissa] (2音節, 3モーラ, 3文字); 「きんさ」[kinsa] (2音節, 3モーラ, 3文字))。だが、1モーラが2文字で書かれるケースがあり(e.g., 「きゅ」[kyu] (1音節, 1モーラ, 2文字))、純粋なモーラ文字であるとも言えない。

- (3) i. 漢字 名詞（外来語以外），動詞や形容詞の語根など
 [→内容語が中心]
 ii. ひらがな 動詞や形容詞の活用語尾，助詞 [→機能語が中心]
 iii. カタカナ 外来語，(中華圏を除く)外国の名前，擬音語・擬態語，
 科学用語(植物名や動物名など)，強調したい語句(英語のイタリック体に相当)，かつての電報文

また、(英語などとは異なり) 日本語の書き言葉では語と語の間にスペースが空けられることはないが、こういった品詞や語源による文字タイプの書き分けが語（あるいは形態素）の境界線を示す役割を担っており、「読む」という行為を多少なりとも容易にしているのである（Rogers 2005, p. 66）。以下 (4) に例を挙げる（(4-i) と (4-ii) は、Vance (2005, p. 3) に若干の修正を加えている）。((4-ii) の「|」は語の境界線を示し、「C」は漢字、「H」はひらがな、「K」はカタカナを指す。）

- (4) i. 食事がデザートに入った時、司会者の青年が典子達のいるテーブルにやって来た。

- ii. 食事|が|デザート|に|入った|時|、|司会者|の|青年|が|典子|
 C C H K K K K H C H H C C C C H C C H C C

達|の|いる|テーブル|に|やって|来た。

C H H H K K K K H H H H C H

- iii. しょくじがでざあとにはいったとき、しかいしゃのせいねんが
 のりこたちのいるてえぶるにやってきた。

(4-ii) を見ると、語の境界線と文字タイプが一致しているのが分かる（動

詞「入った」「来た」は、語根は漢字、活用語尾はひらがなで書き分けられている)。また、全てひらがなで書かれた(4-iii)を漢字仮名混じりの(4-i)と比較してみると、読みやすさの違いは明らかであろう。

一方、英語の文字システムはどうかと言うと、アルファベット文字の1タイプのみである。アルファベット文字は、基本的に1文字が1音素を表す表音文字である。語と語の間にはスペースが空けられ、文の1語目と固有名詞の最初の字が大文字化されて表記される。だが、何らかの意図で語の全ての字が大文字で書かれることもあれば(e.g., “Arizona” vs. “ARIZONA”)³、例えばイタリック体のように異なる書体を使って、注意を喚起したり語句を強調したりすることもある(e.g., “Arizona” vs. “Arizona”) (Rogers 2005, p. 11, p. 16)。

3 日本語における文字タイプの操作と英語翻訳

それでは、日本語で書かれた小説などにおいて、文字タイプの操作によって生じる視覚的な表現がアルファベット文字のみを持つ英語に翻訳される場合、どのような対応がなされるのであろうか。ここでは、ケーススタディとして、村上春樹(著)の長編小説『海辺のカフカ』(2002)に登場する「ナカタさん」、そして『1Q84』(2009, 2010)に登場する「ふかえり」の話し言葉を取り上げる。この二人はどちらも物語中で他の登場人物に「変わった話し方をする」という印象を与えており、実際に読者も同様の印象を受けるのであるが、その要因の一つとして変則的な文字タイプによる表記が重要な役割を果たしている。本セクションでは、この二人の登場人物の話し言葉における文字タイプの操作とその効果について考察し、それぞれの作品の英語翻訳(*Kafka on the Shore* (2005) (Philip Gabriel, Trans.); *1Q84* (2011) (Jay Rubin and Philip Gabriel, Trans.))においてどのよ

3 電子メールにおける英語のコミュニケーションで、全て大文字で書くと「大声で叫んでいる(“shouting”)」ことを意味するようである(Rogers 2005, p. 11)。

うに対応されているのかを分析する。

3.1 『海辺のカフカ』 ナカタさんの話し言葉⁴

『海辺のカフカ』（2002）に登場する「ナカタさん」は、偶数章の主人公で、東京都中野区に在住する60歳過ぎの男性である。子どもの頃に起きたある出来事を境に、それまでの記憶と読み書きの能力を失う。現在は都から補助を受けながら生活しているが、猫と会話ができるため、近所の奥さん達からいなくなった飼い猫を探すように依頼され、僅かな臨時収入を得ることもある。

ナカタさんの話し方は、他の登場人物に「すこし風変わり」であるという印象を与える。以下（5）は、彼の話し方にそういった印象を抱いた猫のオオツカさんとの会話からの引用である（下線は引用者による）。

- (5) 「はい。行方のわからなくなった猫さんを探すのであります。このようにナカタは猫さんと少し話ができますので、あちこちまわってジョウホウをあつめまして、いなくなった猫さんの行方をうまく探しあてることができます。それでナカタは猫さん探しの腕がいいということになりまして、あちこち迷子の猫さんを探してくれと頼まれるのであります。[…]

（村上 2002, p. 82; 山木戸（2018, 2019）に引用）

(5) の話し言葉における「風変わりさ」は具体的に何に起因するのかというと、「であります」、自称詞としての苗字「ナカタ」の使用、そして「猫さん」に見られる「～さん」の使用であろう（該当部分に下線）。「であり

4 本セクションは、山木戸（2018, 2019）における変則的なカタカナ表記の使用とその英語翻訳について書かれたセクションの概要を述べている（抜粋箇所あり）。ナカタさんの話し言葉に観察される特徴の分析の詳細は、山木戸（2018, 2019）を参照のこと。

ます」と自称詞としての苗字の使用は、フィクション等でどちらも軍隊の中で自分よりも階級の高い者を対象とした話し言葉で観察されると報告されており（衣畑・楊 2007）、実際にナカタさんの話し言葉は、彼が聞き手に対して敬意の念や忠誠心、そして服従の念を抱いているような印象を与える。一方、「猫さん」に見られる「～さん」の使用は、純粹で世間を知らない幼児のイメージと結びつくと言う（岡崎・南 2011）。ナカタさんは「猫」以外にも、「雷」や「エンジン」など、自然・物体にも「～さん」をつけるのであるが、この幼児のような柔らかいイメージは、上で見た軍隊的なイメージと相反し、これらの特徴の組み合わせが彼の言葉づかい全体に風変わりな印象を作り出していると言えよう。

3.1.1 ナカタさんの変則的なカタカナ表記の使用

さて、ナカタさんの話し言葉に「風変わりさ」を作り出す特徴として、実はもう1つ、読者のみが視覚的に理解する特徴がある。(5)の「ジョウホウ」(cf.「情報」)に見られるように、彼の発話の中には、(自身の苗字の「ナカタ」に加え)本来漢字で書くのが一般的であると思われる語にカタカナ表記が用いられていることがある。(6)に他の例を挙げる(該当部分に下線)。

- (6) a. 「[…] とくにナカタのお父さんは、もうとつくになくなりましたが、大学のえらい先生でありまして、キンユウロンというものを専門にしておりました。それからナカタには弟が二人おりますが、二人ともとても頭がいいのです。一人はイトウチュウというところでブチョウをしておりますし、もう一人はツウサンショウというところで働いております。[…]

(村上 2002, pp. 79-80)

- b. 「[…] 都バスにはショウガイ者とくべつバスというものを見れば、なんとかのすることはできますが」

「じゃあ、何をして暮らしているんだい？」

(ibid., pp. 80-81)

(7) a. カラスヤマ [東京都世田谷区の地名] cf. 烏山
b. フジガワ [地名] 富士川
c. トーメイ (高速道路) [地名] 東名(高速道路)
d. ショウエイソウ [建物名] (中野区のナカタさんのアパート)
松栄 (?) 荘

– 9 –

読者は、ナカタさんの話し言葉の中に、漢字に代わってカタカナで表記された語が出てくる度に、彼の言語能力・言語運用が平均的な大人と異なっていることに気づかされるのである。

3.1.2 英語翻訳におけるナカタさんの変則的なカタカナ表記の使用への対応

それでは、英語翻訳版において、変則的にカタカナで表記されたこれらの語はどのように表現されているのであろうか。英語で使用される文字はアルファベットのみであり、カタカナと同じく表音文字のタイプであるが、英語において音と綴りが必ずしも一対一の関係にないことなどもうまく利用し、ナカタさんがこれらの語の意味を理解せずに使っていることを巧みに表現している。(8)は Philip Gabriel 氏による (6a) の英語翻訳である(カタカナ表記の語に相当する語句に下線)。

- (8) “Nakata’s father—he passed away a long time ago—
was a famous professor in a university. His specialty was
something called theory of fine ants. I have two younger
brothers, and they’re both very bright. One of them works
at a company, and he’s a depart mint chief. My other brother
works at a place called the minis tree of trade and indus tree. [...]”
(p. 45)

(8) に示すように、原著においてカタカナで表記された語に対応する語句は全てイタリック体で書かれている。(ただし、固有名詞「イトウチュウ [会社名]」(cf. 伊藤忠) は “a company” と、一般化され訳されている(波線部)。)例えば、「キンユウロン」 “theory of finance” のように相当する英語が複数の語からなる場合、内容語 “theory” 「(理) 論」と “finance” 「金

融」が修正の対象となり、“theory”は誤った綴りで“theery”と書き換えられ、“finance”はナカタさんが意味を理解して使っていると思われるような単純な語“fine ants”の2語に置き換えられている。“theery”と“fine ants”の発音はそれぞれ元々の語の発音に十分近い。このように、発音は元々の語の発音と同じか近くなるようにして、誤った綴りを与えたり、語を二分割しそれぞれを同じか似たような発音の語と入れ替えたりしているのである。後者のような「語句のこっけいな誤用のこと（特に音や形態が類似している場合に起こりやすい）」を「マラプロピズム (malapropism)」と言う（田中（編）1988, p. 381）。

- (9) 誤った綴り (正) (ナカタさん)
- a. キンユウロン (金融論)
theory (of finance) → theery …
- b. ショウガイ (障害) handicap → handycap
- (10) マラプロピズム (malapropism)
- a. キンユウロン (金融論)
(theory of) finance → … fine ants⁶
- b. ブチョウ (部長)
(a) department chief → depart mint …
- c. ツウサンショウ (通産省)
(the) ministry of trade and industry
→ minis tree of … indus tree
- d. ホジョ (補助) subsidy → sub city

6 英語母語話者を対象としたアンケート調査（2018年5月に実施）では、回答者12名中4名が“fine ants”は（“finance”ではなく）“fine arts”の置き換えであると誤った予測をした。

一方、英語翻訳版におけるカタカナ表記の地名や建物・施設名などの固有名詞（(7) 参照）への対応は一貫していない。地名の例を挙げると、「カラスヤマ（烏山）[東京都世田谷区の地名]」は“a place called Karasuyama”「[烏山]というところ」と訳されているのに対し、以下（11）に示すように、音節ごとにハイフンで区切られているものもある。

(11) a. フジガワ（富士川）[地名]

Fujigawa → Fu-ji-ga-wa

b. トーメイ（東名（高速道路））[地名]

the Tomei (Highway) → … To-Mei …

地名や施設名などの固有名詞は、((9) (10) に挙げたような一般名詞と異なり) 日本語でも英語でも基本的に同じ音で表され、英語版の読者にとって初めて目にするものも含まれるのであろう。従って、誤った綴りやマラプロピズムの方法を適用することができず、その代わりに音節ごとにハイフンで区切ることによって、ナカタさんがよく分からずにそれらの名称を使っていることが表現されている⁷。

3.2 『1Q84』ふかえりの話し言葉

『1Q84』（2009, 2010）に登場する「ふかえり」は、本名は「深田絵里子」という17歳の「目が印象的な美少女」（洋泉社編集部（編）2013, p. 81）

7 アンケート調査の回答の中で、英語におけるこういったカタカナ表記の語への対応は、読者にナカタさんの識字能力の欠如を思い起こさせるのはもちろんのこと、「語を音としてでしか理解していない」「自分に関わりのないような抽象的な意味が理解できない」「流暢に話せない」「語を音節ごとに区切らなければ発音できない」など、母語を獲得中の子どものイメージとも結びつくと言われている。ナカタさんの日本語の話し言葉において、「猫さん」などの「～さん」の使用によって表現されていた子どものような印象は、英語版の言葉づかいの中にも保たれているのである。

である。彼女は10歳のとき、父親が教祖である宗教の施設を脱出した。現在、彼女の保護者となっている戎野^{えびすの}の話によると、当時は「誰に対しても口をきけない状態」で、「話しかけても、それに対して肯くか首を振るか、その程度のことしかできなかった」(村上 2009, p. 262)と言う。それ以降、会話の能力は向上したものの、ふかえりの話し方は他の登場人物に「一風変わっている」という印象を与える。また、彼女はディスレクシア(読字障がい)を持っている。以下(12)は、ふかえりの話し方にそういった印象を抱いた天吾(主人公)との会話からの引用である。

- (12) ふかえりは六時二十二分に姿を見せた。[…][「遅れてすみません」もなければ、「お待ちになりましたか」もなかった。「初めまして」「こんにちは」さえない。唇をまっすぐに結び、天吾の顔を正面から見ているだけだ。[…]

[…]

ウェ이터がやってきて、彼女の前に水のグラスとメニューを置いた。それでもふかえりはまだ動かなかった。メニューに手を触れようともせず、ただ天吾の顔を見つめていた。天吾は仕方なく「こんにちは」と言った。[…]

ふかえりは挨拶を返すでもなく、そのまま天吾の顔を見つめていた。「あなたのこと知っている」、やがてふかえりは小さな声でそう言った。「僕を知ってる？」と天吾は言った。

「スウガクをおしえている」

天吾は肯いた。「たしかに」

「二カイきいたことがある」

「僕の講義を？」

「そう」

彼女の話し方にはいくつかの特徴があった。修飾をそぎ落としたセンテンス、アクセントの慢性的な不足、限定された(少なくとも限定

されているような印象を相手に与える) ボキャブラリー。小松が言うように、たしかに一風変わっている。

(村上 (2009, pp. 83-84) ; 住田 (2018, pp. 312-313), 西田 (2018, pp. 89-90) に一部引用)

天吾はこのとき初めてふかえりと会って会話をしたのであるが、彼女の話し方には「修飾をそぎ落としたセンテンス、アクセントの慢性的な不足、限定された(少なくとも限定されているような印象を相手に与える)ボキャブラリー」といった特徴があり、直ちに「一風変わっている」という印象を抱いたようである((12)の該当部分に波線)。実際に、彼女の発話は1文1文が短く、基本的には必要最低限の情報しか含まない。また、敬語が使われてはいないものの、くだけた印象を与えることはない。格助詞(e.g., 「が」「を」)を省略することも⁸、終助詞(e.g., 「よ」「ね」)を使うことも、縮約形(融合された形)を使うこともなく(e.g., 「あなたのこと知っている」((12)より)(cf. 「…知ってる」); 「…あまりすきではない」(p. 535)(cf. 「…すきじゃない」)), どことなくロボットが話しているような印象である。会話はこの後もしばらく続くが、彼女の声は「アクセントを欠い[て]」おり(p. 113)、天吾にときどきする質問も文末で抑揚は上らず、質問であると分かりにくい。(天吾は「疑問符のない質問」と呼んでいる(以下(13)の引用における波線部。))以下(13)は、(12)に始まった初対面の二人の会話における最後の部分の引用である。

(13) 「あってもらうひとがいる」とふかえりは言った。

「僕がその人に会う」と天吾は言った。

ふかえりは肯いた。

8 ただし、物語上のふかえりの最初の発話、(12)における「あなたのこと知っている」では、格助詞「を」が省略されている(cf. 「あなたのことを知っている」)。

「どんな人？」天吾は質問した。

質問は無視された。「そのひととはなしをする」と少女は言った。

「もしそうすることが必要なら、会うのはかまわない」と天吾は言った。

「ニチヨウのあさはあいている」と疑問符のない質問を彼女はした。

「あいている」と天吾は答えた。まるで手旗信号で話をしているみたいだ、と天吾は思った。

(ibid., p. 98; 金水 (2016, pp. 11-12) , 西田 (2018, p. 90) に引用)

「まるで手旗信号で話をしているみたいだ」(波線部)というのは、「[…」、会話が弾むような感覚は一切なく、機械と情報のやり取りをしているような印象」(西田 2018, p. 90) なのであろう。

3.2.1 ふかえりの変則的なカタカナ表記の使用

ふかえりの話し言葉には、上記の特徴以外にも、読者のみが視覚的に理解できる表記的特徴が存在する。(12) (13) の例からわかるように、彼女の発話は主にひらがなで書かれ、漢字の使用はごく僅かである。以下 (14) は、ふかえりが使用する漢字の例の意味的な分類を示す (住田 2018, p. 317)。

- (14) i 数字: 二, 三, 九, 二十
ii 生活の中での基本的行為・思考に関わるもの: 知, 書, 着, 帰, 行,
食, 思, 来, 見, 出
iii その他: 白, 人, 今, 気

一方で、(12) の「スウガク」(cf. 「数学」)、「ニカイ」(cf. 「二回」) 、(13) の「ニチヨウ」(cf. 「日曜」) など、ふかえりの発話の中には本来漢字で書くのが一般的であると思われる語にカタカナ表記が用いられること

がある（金水 2018; 牧野 2018; 住田 2018）。『海辺のカフカ』のナカタさんの話し言葉と同様に（セクション3.1.1参照）漢語が中心であるが、比較的簡単に思われる和語、そして固有名詞もカタカナで書かれている（住田 2018, p. 314）。

(15) ふかえりの発話に見られる変則的なカタカナ表記の例

- i. 漢語：スウガク（数学），ニカイ（二回）⁹，センセイ（先生），
ショウセツ（小説），ソンザイ（存在），イミ（意味），
ニチヨウ（日曜），インサツ（印刷），
キシャカイケン（記者会見），シツモン（質問），
チュウイ（注意）
- ii. 一部の和語：コエ（声），フク（服）
- iii. <固有名詞> 地名：シンジユク（新宿）
タチカワ（立川），フタマタオ（二俣尾），
シナノマチ（信濃町）
人名：コマツさん（小松さん），アザミ（？）

このように、ふかえりの発話は主にひらがなで書かれ、使用する語彙は比較的簡単なものばかりで数も限定されており、その中には僅かな漢字に加え、（漢字に代わって）カタカナで表記されるものが含まれるのである。この理由として、住田（2018）は「表意文字である漢字の使用を避け、あえて表音文字の「ひらがな」と「カタカナ」を用いることで、言葉（の意味）に対する認識の不透明さを暗に示し、ふかえりの抱える学習障害という性質を象徴的意味として表現しているものと思われる」（pp. 314-315）と述べている¹⁰。

9 2009年発行の単行本では「二回」（p. 84）となっているが、2012年発行の文庫本では「回」がカタカナ表記「ニカイ」（p. 107）に変更されている。

また、ふかえりの話し言葉には句読点・疑問符が使用されていない。特に疑問符に関して、ふかえりは文末で「抑揚を上げずに」質問するため、主人公の天吾はそれが疑問文であると判別するのに難しさを感じているが、それは表記上にも表れていることが分かる。これらの特徴と合わせて、ひらがな中心のふかえりの話し言葉は、語（あるいは形態素）の境界線を分かりにくくさせ、読者が1字1字たどって読んでいくとき、彼女のアクセントを欠いた平板な話し方を実感することになるのではないか。

3.2.2 英語翻訳におけるふかえりの変則的なカタカナ表記の使用への対応

それでは、英語翻訳版 (Murakami 2011) において、ふかえりの話し言葉における変則的なカタカナ表記の語はどのように表現されているのだろうか。ナカタさんの英語の話し言葉で見られたように、誤った綴りやマラプロピズムの方法が適用されたり、地名などの固有名詞は音節ごとにハイフンで区切って表記されたりしているのか。例えば、以下 (16) の例を見てみると、原著と同様に一度に発せられるのは1文のみであり、1文

10 (15-i) の「チュウイ」(cf. 「注意」) には、ひらがなで表記された「ふかく」(cf. 「深く」) が続く(村上 2009, p. 534)。本来であれば、「ふかく」が「チュウイ」と複合するとき、連濁が起こり「ぶかく」となるはずである。ふかえりの発話に僅かながら観察される他の複合語を見てみると、「たちぎき」(cf. 「立ち聞き」)(p. 533)、「おきざり」(cf. 「置き去り」)(村上 2010, p. 56) など、連濁が起こっている。ここで注目すべきは、これらは全てひらがなで書かれている和語であるのに対し、「チュウイふかく」の1語目、「チュウイ」はカタカナで書かれた漢語であるという点である。このカタカナ表記は、ふかえりがその語の意味を理解せずに単なる音の羅列として使っていることの表れであり、実際のところ「ふかく」は「チュウイ」と複合しての理解がなされておらず、それが音声上でも示されているのではないと思われる。

参考までに、特異的言語障害 (specifically language-impaired) をもつ子どもの中には、語形成の複合の過程で連濁の規則を適用できないケースがあると言う (T. Vance 氏のご教示による (2019年3月12日私信)) ; Fukuda and Fukuda 1999)。ただし、特異的言語障害とディスレクシアがどのような相関性をもつのかはまだ解明されていないようである (橋本、他 2016, p. 98) (ふかえりはディスレクシアを持っているという設定)。

1 文が短い。だが、カタカナ表記の語に関しては特段の対応が見られず、全て「標準的」に訳されている（住田 2018）。牧野（2018）も、原著では「漢語系のことばに弱いことを示すために、漢語よりももっとソト的な片仮名で表記して[いる]」一方で、「翻訳者のジェイ・ルービン[が]表記を英訳に移すことをして」おらず、「字体をイタリックにしたり大文字にしたりもして[いない]」（p. 31）と指摘する。

- (16) a. 「あなたのこと知っている」、やがてふかえりは小さな声でそう言った。

「僕を知ってる？」と天吾は言った。

「スウガクをおしえている」

天吾は肯いた。「たしかに」

「二カイきいたことがある」

「僕の講義を？」

「そう」

((12) を一部抜粋)

“I know you,” she murmured at last.

“You know me?” Tengo said.

“You teach math.”

He nodded. “I do.”

“I heard you twice.”

“My lectures?”

“Yes.”

(p. 44; J. Rubin, Trans.)

- b. 「あってもらうひとがいる」とふかえりは言った。

「僕がその人に会う」と天吾は言った。

ふかえりは肯いた。

「どんな人？」天吾は質問した。

質問は無視された。「そのひとはなしをする」と少女は言った。

「もしそうすることが必要なら、会うのはかまわない」と天吾は

言った。

「ニチヨウのあさはあいている」と疑問符のない質問を彼女はした。
「あいている」と天吾は答えた。まるで手旗信号で話をしている
みたいだ、と天吾は思った。 (= (13))

“There’s someone to meet,” Fuka-Eri said.

“Someone you want me to meet?”

She nodded.

“Now, who could that be?”

She ignored his question. “To talk to,” she added.

“I don’t mind,” Teno said, “if it’s something I should do.”

“Are you free Sunday morning,” she asked without a question mark.

“I am,” Teno said. *It’s as if we’re talking in semaphore*, he thought.

(p. 51; J. Rubin, Trans.)

(16a) の「スウガク」は“math”、「ニカイ」は“twice”、(16b) における「ニチヨウ」は“Sunday”と訳されている。また、「シンジユク」や「タチカワ」(p. 138) のような固有名詞の地名も同様に、“Shinjuku” “Tachikawa” (p. 73) と「標準的」に訳されている¹¹。

ふかえりの話し言葉におけるカタカナ表記以外の表記的特徴への対応に関しては、文の最後に(原著と異なり)ピリオドが付けられてはいるものの、(16b) における疑問文「ニチヨウのあさはあいている」(「疑問符のない質問」(波線部)) では英語でも同様に疑問符“?” が付けられていない。これは、住田 (2018) による「[…」、構文としては疑問文の形をとってはい

11 「シナノマチ」(p. 374)には“Shinano-machi” (p. 208) というように、ハイフンが使われているが、「信濃町」という地名には一般名詞「町^{まち}」が含まれているため、英語訳において“machi”の前にハイフンを入れるのは極めて標準的である。

るが、疑問符を意図的に省略することで、ふかえりのアクセントを欠いた抑揚のない話し方を少しでも表現しているのではないかと思われる。」(p. 320) という指摘のとおりであろう。

Philip Gabriel 氏へのインタビュー

Philip Gabriel 氏は『海辺のカフカ』(2002) (*Kafka on the Shore* (2005))、『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』(2013) (*Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage* (2014)) など、村上春樹作品の英語翻訳を多数手がけているが、『IQ84』は Jay Rubin 氏との共訳である。原著の『IQ84』は BOOK 1 < 4 月- 6 月 > (2009)、BOOK 2 < 7 - 9 月 > (2009)、BOOK 3 < 10 月-12 月 > (2010) の 3 冊に分かれており、そのうち Rubin 氏が BOOK 1 と BOOK 2 を、Gabriel 氏が BOOK 3 を担当している (英語版では 1 冊 (全 926 ページ) にまとまっている (BOOK 1 (pp. 1-310)、BOOK 2 (pp. 312-592)、BOOK 3 (pp. 593-926)))¹²。Gabriel 氏によると (2019 年 3 月 9 日私信)、「翻訳者によってスタイルが違うので、共訳はお互いある程度妥協しなくてはならず、また編集者も 2 つの異なるスタイルをうまく混ぜ合わせていかなければならない」と言う。ただ、Gabriel 氏の担当は最後の BOOK 3 であり、「編集者は先に Rubin 氏の翻訳 (BOOK 1 と BOOK 2) から読んでいったため、ある意味 Rubin 氏が選んだものを基準としたのだと思う。だが、私自身、ふかえりの話し言葉についてはかなり考えたのをよく覚えている」とのことである。また、「ふかえり」の英語のローマ字表記については、何が一番いいか (“Fuka Eri”, “Fuka-Eri”, “Fukaeri”) Rubin 氏と話し合い、Gabriel 氏は “Fukaeri” が一番いいと思ったが、Rubin 氏はハイフンを使う方を好んだそうである (実際の翻訳では “Fuka-Eri” が使われてい

12 Gabriel 氏の Jay Rubin 氏との共訳についてのインタビューは、Hoyt (2011) を参照のこと。

る)。“Fukaeri”が一番いいと思った理由として、Gabriel 氏は「おそらく、ふかえりの“run-together”の話し方を模倣するため」と言う。 (“run-together”というのは、それ自体は「混ざる、混じり合う」という意味である(瀬戸・投野(編)2012)。ここでの「“run-together”の話し方」というのは、文字タイプの書き分けをせず、ひらがなが中心の表記において句読点なども用いられていないために、語と語の境界が分かりにくく、ふかえりも1つ1つの語を明確に理解していない印象であり(住田(2018)の言葉を借りると「言葉(の意味)に対する認識の不透明さ」、よって語と語が混ざり合っているようなイメージで使っていると思われる。そう考えると、ふかえりの英語の話し言葉において、「シンジユク」「タチカワ」など、カタカナで表記された固有名詞の地名を(ナカタさんの英語の話し言葉のように)音節ごとにハイフンで分けて“Shin-ju-ku”“Ta-chi-ka-wa”などと表記するのは、彼女の話し方の印象に合わなかったことになるであろう。)

Gabriel 氏(2019年3月10日私信)は、ふかえりの話し言葉を英語に翻訳する際、(これまでに他の作品の翻訳でも行ってきたように)英語で可能な範囲内で、原著で感じられたものをできる限り再現するように試みたと言う。「疑問文に疑問符を付けないというのは顕著な特徴であったので、これは翻訳でも残したかったし、(もう大分前のことなので、記憶が少し薄れている可能性があるが)1つ1つの発話の長さや句読点の使い方など、かなり近づけるようにしたと思う」とのことである。また、ふかえりの話し言葉の全体的な印象とその表記について、Gabriel 氏は以下のように語っている。

My impression is that she speaks like a robot or a 宇宙人.
There is an old scene, maybe a cartoon, where aliens arrive
and say to people on Earth “Take me to your leader.” It is
flat, mechanical speech. The main image I have of Fuka-Eri’s

speech is that she has no emotion or intonation. So imagine the “Take me to your leader” line done in a complete monotone. How could you reproduce this monotone? Takemetoyourleader? I did contemplate doing what Alfred Birnbaum did with the Sheep Man’s speech in *Wild Sheep Chase*, namely having it all run together like that,¹³ but decided against it. It would be derivative (i.e. I would just be copying him) and also I disliked it when I read *Wild Sheep Chase* in English since it’s so hard to read. I felt sorry for readers trying to decipher it! So I was left unable to really show her lack of emotion or inflection (except for saying she spoke in a flat monotone).

私の印象では、彼女はロボットあるいは宇宙人のように話す。宇宙人が地球にやって来て、人間に “Take me to your leader.” という古いシーン（おそらく漫画）があるが、話し方は平板で機械的だ。ふかえりの話し方について私が持っている主要なイメージは、感情も

13 村上春樹（著）『羊をめぐる冒険』（1982）に登場する羊男は「何かに腹を立てているようなしゃべり方」をすると書かれている。以下は彼が最初に登場する部分である。

「中に入っているかな？」と羊男は横を向いたまま早口で僕に訊ねた。何かに腹を立てているようなしゃべり方だった。（p. 334）

この引用部は英語版 (*Wild Sheep Chase* (2003) (Alfred Birnbaum, Trans.)) で以下のように翻訳されている。羊男の “Can I come in?” には語と語の間のスペースがない (“run-together”)。

“CanIcomein?” the Sheep Man said rapid-fire, facing sideways the whole while. His tone was angry. (p. 249)

これ以降の羊男の発話の英語翻訳も、全てこのスタイルで表れている。

イントネーションもないということである。先ほどの “Take me to your leader.” という台詞が完全な一本調子で言われているのを想像してほしい。この単調な話し方をどうやって再現できるだろうか。“Takemetoyourleader”? アルフレッド・バーンバウムが *Wild Sheep Chase* [原題『羊をめぐる冒険』] に登場する羊男の話し言葉[の翻訳]で行ったこと、つまり全て[語を]つなぎ合わせることを私もしようかとじっくり考えたのだが、やらないことに決めた。独創性がないし(彼の真似をしているだけになる)、英語で *Wild Sheep Chase* を読んだとき、読むのが大変で、嫌だったからである。解説を試みる読者を気の毒に思った! そのため、“she spoke in a flat monotone” [「彼女は抑揚をつけず単調に話した」]と言う以外には、ふかえり[の話し方]に感情や抑揚が欠けていることを実際に示すことができないままになってしまったのである。(拙訳)

また、ふかえりの話し言葉においてカタカナ表記で表れた語(「スウガク」「センセイ」「ショウセツ」「キシャカイケン」などの漢語が中心)を翻訳する際に、なぜ(『海辺のカフカ』のナカタさんの話し言葉の英語翻訳で使ったような)誤った綴りやマラプロビズムの方法を適用しなかったのかという質問に対して、Gabriel 氏は以下のように答えている(2019年3月10日私信)。

I'm not sure why I didn't apply these techniques here. I suppose I could have. Fuka-Eri is different from Nakata, since I think she has a normal grasp of language, generally, so maybe that technique wouldn't work. (Nakata is more like a child in that regard.) Since English only has one way of writing, unlike the mixed script of Japanese, how DO you indicate the use, or non-use of hiragana, kanji, or katakana?

I wish I knew. I was reading a popular novel here recently, *The Maze at Windermere*, in which there are chapters written in 18th century English (of a soldier in New England during the Revolutionary War) and one of the characteristics of the writing (supposedly a diary) is that there is uneven capitalization, i.e. many words are capitalized in ways we would not nowadays. One example: “Indeed the British Army has gone about the Destruction of Newport with no want of Enthusiasm… And where there was Business and Commerce there is Inactivity and Rebellion.”¹⁴ It looks like only nouns are capitalized,¹⁵ but maybe—now that I think of it—this could be

14 この引用部 (Smith 2019, p. 30) において、今日の書き言葉では大文字化されないと思われる語は “Destruction”、“Enthusiasm”、“Business”、“Commerce”、“Inactivity”、“Rebellion” である。(ただし、もし “the Destruction of Newport” が (“the Battle of the Bulge” [バルジの戦い] や “the Night of Broken Glass” [壊れたガラスの夜] などのように) 有名な事件の名称であれば、“Destruction” は今日でも大文字で表れると言う (Jeremy Redlich 氏 (2019年11月3日私信))。)

15 18世紀の英語の書き言葉のサンプルとして、Constitution of the United States (1787) [アメリカ合衆国憲法]があり、ここにも今日とは異なる名詞の大文字化が観察される (Martin Murphy 氏のご教示による (2019年11月4日私信))。以下に冒頭の部分を抜粋する (該当の語に下線)。

We the People of the United States, in Order to form a more perfect Union, establish Justice, insure domestic Tranquillity, provide for the common defence, promote the general Welfare, and secure the Blessings of Liberty to ourselves and our Posterity, do ordain and establish this Constitution for the United States of America.

(U.S. Government Publishing Office)

ただし、どの一般名詞にも一貫して大文字化が起こっているわけではなさそうであり (例えば “defence” は大文字化されていない)、その理由は分からない。

参考までに、ドイツ語のように、現代の書き言葉で一般名詞の1字目を大文字化するような言語は存在する。

one way to sometimes indicate the mixed kanji/kana script, with capitalizations coming for all the kanji, I suppose. I don't think this is a practical solution, really, but it's interesting to think about. In Fuka-Eri's case, since she doesn't use kanji, it wouldn't apply.

なぜ、ここでこういったテクニックを使わなかったのかは分からない。たぶん使えたと思う。ただ、ふかえりは概して正常な言葉の理解力を持っていると思うので、ナカタさんとは異なる。よって、あのテクニックはうまくいかないだろう。(ナカタさんはその点でむしろ子どもに近い。) 英語は〔文字タイプが〕混在する日本語の表記とは異なり) 文字 (タイプ) が1つしかないため、ひらがな、漢字、あるいはカタカナが使われていること、あるいは使われていないことをどうやって示すというのか。それが分かっていたらいいのだが。最近こちらで人気の小説 *The Maze at Windermere* を読んだ。その小説には、(アメリカ独立戦争中のニューイングランドのある兵士について) 18世紀の英語で書かれた章があり、その書かれたもの(おそらくは日記)の特徴の1つに、不規則な capitalization [語頭を大文字で書くこと]がある。つまり、今日とは異なる方法で多くの語の語頭が大文字で書かれているのである。1つ例を挙げる。“Indeed the British Army has gone about the Destruction of Newport with no want of Enthusiasm…。 And where there was Business and Commerce there is Inactivity and Rebellion.” 名詞のみが大文字で始まっているようであり、考えてみると、このような方法も時に漢字・仮名混じりの表記を示す方法の1つになりうるかもしれない(その場合、漢字で書かれたものに〔英語訳では〕大文字始まりを使う)。これが有効な解決策だとは思わないが、考えてみるのは面白い。ふかえりの場合は漢字を使わないので、この方法は適用できないであろう。(拙訳)

Gabriel 氏によると、日本語の 3 つの文字タイプ間での操作によって生じる視覚的な表現を、アルファベット文字しか持たない英語に翻訳することは非常に難しいと言う。ただし、その 1 つの文字タイプだけであっても、例えば“capitalization”のテクニックを使って生じる特殊な効果の例を紹介し、今後日本語から英語へ翻訳する過程で表記の対応について考える際に、同様のテクニックが適用できる可能性があることを示唆している。

さて、Gabriel 氏が翻訳を手がけた『1Q84』の BOOK 3 の中に、ふかえりが天吾に宛てて書いた手紙が出てくる（村上 2010, p. 289）。話し言葉と同様に、ここにも「一風変わった」雰囲気が保たれている。

天吾はその電報文のような手紙を三度読み返してから、畳んでポケットに入れた。いつものこ

てんごさん てんごさんはねこのまちからかえ
ってきてこのてがみをよんでいる それはよい
ことだった でもわたしは見られている
だからわたしはこのへやを出ていなくてはな
らない それもいますぐに わたしのことはし
んばいしなくていい でももうここにいること
はできない まえにもいったようにてんごさん
のさがしている人はここからあるいていけると
ころにいる ただしだれかに見られていること
によく気をつけるように

ヒーを飲みながら、ふかえりの手紙をもう一度読み返してみた。例のごとく漢字が極端に少なく、句読点と改行を欠いた文章だ。

この手紙を受け取った天吾によると、「レポート用紙一枚の半分に、青いボールペンを使って、おなじみの楔形文字のようなものが記されていた。レポート用紙よりは粘土板の方が似合いそうな書体[…]」で書かれ、「[…]三ヶ所に太くやわらかい鉛筆で下線がぐいぐいと引かれていた」とある(p. 286)。また、文字タイプなどの表記に関しては、「漢字が極端に少なく、句読点と改行を欠いた文章」であり(p. 289)、漢字が5つ(「見られて」「出て」「人」「気をつける」)(「見られて」は2回出てくる)使われている以外は全てひらがなで書かれている。したがって、この引用部で天吾が言っている「電報文のような手紙」という印象は、使用されている文字タイプについて言っているのではなく(かつての日本の電報はカタカナで書かれていた(上の(3-iii)参照))、まるでスペースを節約するためであるかのように「句読点と改行を欠いて」おり、また「内容は用件のみで、モダリティがない」(金水敏氏(2019年3月16日私信))ところからきているのであろう。

それでは、この手紙は Gabriel 氏によってどのように翻訳されたのか。

day of the week it was, after the sun had reached its zenith. Tengo, on a chair in the cafeteria, sipped the weak coffee and reread the letter from Fuka-Eri. As always she used hardly any kanji at all, and no paragraphs or punctuation.

Tengo you are back from the cat town and are reading this letter that's good but we're being *watched* so I *have to get out* of this place *right this minute* do not worry about me but I can't stay here any longer as I said before the person you are looking for is within walking distance of here but be careful not to let somebody see you

Tengo read this telegram-like letter again three times, then folded it and put it in his pocket. As before, the more he read it, the more believable her

(Murakami 2011, pp. 752-753)

英語の手紙においても、どこことなく変わった雰囲気 that 保たれていると言えよう。原文で下線が引かれていた箇所はイタリック体になっており、

この部分が強調されていることがうかがえる（セクション2を参照のこと）。また、文の1語目であると思われる語の最初の字は大文字化されておらず、“I”（一人称代名詞）以外は全て小文字で書かれている。ピリオドとコンマは用いられておらず、やや大きめのスペースが2箇所に見られる（1行目と最終行）。実際に、Gabriel 氏はこの「電報文のような手紙“telegram-like letter”」の解釈について以下のように語っている（2019年3月10日私信）。

[...] I think this refers more to the use of space. In the old days they tried not to use punctuation, and abbreviated words, all to save space. (I think you were charged by the letter so people tried to save space and make the message very short. Japanese telegrams were written in katakana, right?) Maybe abbreviating words would have been one more technique I could have used here. [...]

[...] ここでは、スペースの使い方について言っているのだと思う。かつてはスペースを節約するだけのために、句読点を使わないようにし、語を略した。（文字数によって料金が決まってきたので、スペースを節約してメッセージを大いに短くしようとしたのだと思う。日本の電報はカタカナで書かれていたね？）もしかしたら、語を略すことも、ここで使えたもう1つのテクニックだっただろう。（拙訳）

また、“I”以外が全て小文字で書かれているのは、かつての英語の電報文が全て小文字で書かれていたというわけではなく、単にふかえりの言葉づかいにおける“run-together”の印象を視覚的に表すためであったと言える。

3.3 まとめ

日本語の書き言葉には、一般的に3つの文字タイプ（漢字・ひらがな・カタカナ）が混在して使われ、また（（外来語以外の）名詞には漢字、助詞にはひらがな、外来語の名詞にはカタカナと言ったように）品詞や語源によって使用される文字タイプが決まっている。一方で、この書き分けの決まりを越えて、ある語（句）に特定の文字タイプが変則的に使用されることがあり、それによって音では表しえない意味を視覚的に表現し、特殊な効果をもたらすことができる。

ここで、文字タイプの変則的な使用による表現とその効果について、例を用いてまとめよう。以下（17）において、（17a）はデフォルトの漢字仮名混じりの文であり、内容語（i.e., 漢語の名詞「日曜」、和語の名詞「朝」、動詞の語根「空（いて）」）は漢字で、助詞「の」「は」と動詞の活用語尾「（空）い」（そして、それに続き持続相を表す接辞「ている」）はひらがなで書かれている。一方、（17b）は全てひらがなで、（17c）は全てカタカナで書かれているが、それぞれの文から受ける印象は随分異なる。

- （17） a. 日曜の朝は空いている。 [デフォルト（漢字仮名混在）]
b. にちようのあさはあいている。 [ひらがなのみ]
c. ニチヨウノアサハアイテイル。 [カタカナのみ]

（17a）に比べて、（17b）（17c）は語（あるいは形態素）の境界が分かりにくく、読むのに1字1字たどらなくてはならず、音声的に平板である印象を受けたかもしれない。また、話者として例えば（17b）は子ども、（17c）は外国人や宇宙人（あるいは電報文のイメージ）などが考えられる。

それでは、以下（18）はどうであろう。（18a）は漢語の名詞「日曜」がカタカナで書かれている。「ニチヨウ」以外はデフォルトの（17a）と同じだが、話者が「ニチヨウ」の意味を理解せずに使っているような印象を受ける。（18a）における漢字で書かれた語がひらがな表記に変えられた（18b）

は、「ニチヨウ」の語の意味の「不透明さ」に加え、話し手として子どもが想定されるような印象が加えられたのではないか。こちらは文全体のイントネーションが少し平板になる。

- (18) a. ニチヨウの朝は空いている。 [漢語の名詞のみカタカナ]
b. ニチヨウのあさはあいている。 [ひらがなベース、漢語の名詞はカタカナ]

(18a)はナカタさんのタイプであり、(18b)はふかえりのタイプである。(ただし、厳密には、ふかえりの発話に句点「。」は使われない。)

このように、(17) と (18) に示した5つの例文は、音声的には全て同一であるのにも拘らず、表記の違いによって、話者による特定の語や文全体の理解、そして想定できる話者のイメージなどが異なっている。それに対して、英語は(仮名文字と同じ)表音文字であるアルファベット文字の1タイプしか持たない。そのため、日本語の文字タイプ間での操作によって生じる視覚的な表現と効果を英語の翻訳上で再現するのが難しいのはもっともであろう。しかしながら、英語の話し言葉におけるナカタさんのカタカナ表記の語への対応の分析や Philip Gabriel 氏へのインタビューを通して、日本語の変則的な文字タイプの使用とその効果は、英語においてもアルファベット文字の範囲内で(ある程度は)再現が可能であることが確認された。(表1)に結果を示す(“SL”は「起点言語 “Source Language”」、 “TL”は「目標言語 “Target Language”」)。

(表1) 日本語の変則的な文字タイプの使用と英語翻訳における対応

SL: 日本語				TL: 英語
使用する文字タイプ (デフォルト)	→ (変則的)	読者が受ける印象	話者のイメージ	アルファベット文字による可能な対応方法の例
<語のレベル>				
漢字	カタカナ	☞ 話者はその語の意味を理解していない	言語能力・言語運用が平均的な大人と異なっている (外国人の可能性あり)	一般名詞: 誤った綴り, マラプロピズム 固有名詞: 音節ごとにハイフンで区切る
	ひらがな	?	同上 (幼児の可能性あり)	?
仮名 (ひらがな・カタカナ)	漢字	☞ 過去の時代の話し言葉 (?)	過去の時代の人 (?)	一般名詞の (不規則な) 大文字化 “capitalization”
<文のレベル>				
漢字仮名交じり	ひらがな	☞ 話者の話し方にアクセントやイントネーションが欠けている	言語能力・言語運用が平均的な大人と異なっている (幼児の可能性あり)	“run-together” の表記 (語と語の間にスペースを入れない); ¹⁶ コンマ・ピリオド・疑問符等を使わない
	カタカナ	☞ 同上 (電報文のイメージも)	同上 (外国人・宇宙人の可能性あり)	同上

これ以外にも、日本語のテキストで句読点や符号 (疑問符など) が意図的に使用されていなければ、英語翻訳もそれに合わせ、また強調したい箇所

16 この他にも、発話文自体は標準的な表記法を使い、該当する発話の後に、例えば “she spoke in a flat monotone” [「彼女は抑揚をつけず単調に話した」] と説明を加える方法もある。(ただし、この方法はアルファベット文字が持つ性質とは関係がない。)

等をイタリック体にすることも可能である¹⁷。

4 英語の日本語翻訳における変則的な文字タイプの使用

これまでのところ、日本語で書かれた文学作品などが英語に翻訳される際、3つの文字タイプ間での操作によって生じる視覚的な表現がどのように対応されるのか分析してきた。それでは、今度は逆に英語から日本語へ翻訳される際、翻訳者によっては日本語の文字システムの特徴を生かし、意図して変則的な文字タイプを使用することはあるのか。もしそうであれば、どの文字タイプがどのような要素を表現するために使用されるのであろうか。本セクションでは、ケーススタディとして Mark Twain (著) *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) の主人公 Huck の英語の話し言葉とその日本語訳を考察する。本作品の日本語訳は、一番古いもので中村爲治 (訳) 『ハックルベリー フィンの冒険』 (1941) があり、最近のものでは柴田元幸 (訳) 『ハックルベリー・フィンの冒けん』 (2017) など、複

17 Philip Gabriel 氏が英語翻訳を手がけた宮下奈都 (著) 『羊と鋼の森』 (2015) (*The Forest of Wool and Steel* (2019)) において、物語の最後に登場人物が「羊」という漢字は他の漢字 (「善」「美」) に含まれていると話すシーンがある。

「外村くんのところ、牧羊が盛んなんでしょう。それで思い出した、善っていう字は、羊から来ているんですって」

「へえ」

「美しいっていう文字も、羊から来てるって、こないだ読んだの」

(pp. 242-243)

この会話がどのように英語に翻訳されているかという点、[「羊」「善」「美」]の漢字3つが全てそのまま使用されているのが分かる。

[...] ‘There’s lots of sheep farming where you grew up, isn’t there? I was thinking how the Chinese character for *good* and *excellent*, 善, contains the character for *sheep* 羊.

‘Really?’

‘And I read recently how the character for *beauty*, too, 美, is derived from the character for *sheep*.’

(p. 215)

Gabriel 氏によると、このように出版社が英語翻訳に漢字の使用を認めるケースもあるそうである (2019年3月10日私信)。

数刊行されているが(児童書も多数あり)、本セクションでは柴田元幸(訳)における仮名文字(ひらがなとカタカナ)の使用を中心に分析する。

4.1 Huck の英語の話し言葉

Mark Twain (マーク・トウェイン) (著) *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) の物語の舞台は、1834年から1845年ぐらい (Rasmussen 2014, p. 307) の「[アメリカ]ミシシッピー川とその流域の町や村であり、南北戦争以前の奴隷制度下の南部である」(井川 2010, p. 58)。主人公のハックルベリー・フィン(通称: ハック)は、この作品の語り手であり、年齢は14歳¹⁸、「砂糖樽^{だる}をねぐらに、着のみ着のまま、気の向くままに自由に暮らす、寂しがりやの浮浪児である。母は亡く、父は行方知れず^{ゆくえ}」(井川 2010, p. 57) といったような設定である。「姉妹作品である *The Adventures of Tom Sawyer* [(1876)] (Chapter 6) で初めて Twain の作品に登場」(那須 1986, p. vii) した。

著者のトウェインは、物語に入る前に“EXPLANATORY.”(「注」)を付け、「本書には四種類の方言(“dialect”)が使われている」と記している。ハックが話すのは、そのうちの1つ「パイク郡方言(“Pike-County dialect”)」であり(Rasmussen 2014, p. 307)、「ろくに学校にも行っていない、半分浮浪者の少年が使いそうな言葉だけを使って[…]」(柴田 2017, p. 532) いるような印象を与えると言う。物語は主人公ハックの一人称の語りで進行していくが、柴田(2018a)は原文のハックの語りの特徴として以下(19)の3点を挙げている(p. 2)。

- (19) i. 英語が標準的ではなく、文法的に正しくないこと
- ii. スペルの間違いなどがあり、ハックが書いたものであること
- iii. (少し次元が違うが) 作品全体が行き当たりばつりに書かれ

18 柴田(2019)によると、ハックの推定年齢は13~14歳であると言う(p. 8)。

ていること

ここでは、この中でも特に言葉づかいに関わる (19- i) と (19- ii) (ハックの英語の文法とスペル) に着目してみよう。以下 (20) の引用は物語の冒頭のパラグラフである。

- (20) You don't know about me, without you have read a book by the name of "The Adventures of Tom Sawyer," but that ain't no matter. That book was made by Mr. Mark Twain, and he told the truth, mainly. There was things which he stretched, but mainly he told the truth. That is nothing. I never seen anybody but lied, one time or another, without it was Aunt Polly, or the widow, or maybe Mary. Aunt Polly—Tom's Aunt Polly, she is—and Mary, and the Widow Douglas, is all told about in that book—which is mostly a true book; with some stretchers, as I said before.

(Twain 2014, p. 9; 柴田 (2017, p. 535) に引用)

“ain't” は *be* 動詞の現在形否定 (“am not” “aren't” “isn't”) の非標準形であり、平均して 1 ページにつき 1 回ぐらいの割合で出てくるようである (Rasmussen 2014, p. 308)¹⁹。その他の頻度の高い非標準的な文法項

19 アーネスト・ヘミングウェイは、『『アフリカの緑の丘』(1935) で、「アメリカの近代文学はすべてマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』という一冊の本から出発している…… それ以前には何もなく、それ以後にもこれに匹敵するものはない」と書いている」(後藤 2010, p. 44)。だが、本書がアメリカで発行されたとき、「言葉づかいが粗野で非文法的 (“coarse and ungrammatical”) である」と批判され、米国マサチューセッツ州コンコード (“Concord”) の公立図書館では、出版から 1 ヶ月後の 1835 年 3 月に、貸し出しの対象から除外されたと言う (井川 2010, p. 60; Rasmussen 2014, p. 308; 柴田 2019, pp. 10-11)。

目として、二重否定（全体の意味は否定）がある（引用部の “ain’t no matter” 以外にも、同ページ内に “I couldn’t stand it no longer, …”、“[…], and I couldn’t do nothing but…” など5箇所で観察される）。また、“that ain’t no matter” は “that doesn’t matter”、“There was things…” は “There were things…”、“without you have read a book…” は “unless you …”、“That book was made by …” は “That book was written by …” を使うのが「標準的」である（柴田 2017, p. 536）。句読点の使い方も「[普通]の書き方とはどうもずれて」おり、実際に、「[1899]年ごろに刊行された第四版ではこの特異な句読点が「添削」されており、長年多くの版がこれに倣ってきた」と言う（ibid.）（例えば、第四版では上の（20）の1行目 “[…] about me”、6行目 “[…] but lied” の後ろのカンマは削除された（p. 537））。また、間違ったスペルとして、“sivilize”（cf. “civilize” 「文明化する」）という有名な例がある（以下（21）の該当部分に下線）。

- (21) The Widow Douglas, she took me for her son, and allowed she would sivilize me; but it was rough living in the house all the time, considering how dismal regular and decent the widow was in all her ways; [...]. (p. 9)

この “sivilize” のスペルの間違いはこれ以降にも出てくるが、「ハックを文明化しようとする人たちに対するさりげない皮肉になっている」（柴田 2017, p. 538）と言う。

このように、ハックが話す英語の方言には「標準的」ではないがために「間違い」とであるとみなされる文法の項目が含まれ、合わせて句読点の使用やスペルの間違いも見られるのである。一方で、柴田（2017）は、こういった特徴を含む「ハック英語」には「間違いの楽しさ」が感じられ、また「間違い」があるゆえに、彼の語りには雄弁さが感じられると指摘する

(pp. 537-538; 柴田 2018a, pp. 2-3)。

4.2 日本語翻訳におけるハックの言葉づかいの特徴への対応

「ハック英語」における「間違い」は、彼の語りが雄弁であることを示すと同時に、彼の「無教養さ」の表れでもあるのだが、ハックの語りはどのような日本語に翻訳されているのであろうか。まず、*Adventures of Huckleberry Finn* (1885) の最初の日本語翻訳、中村爲治 (訳) 『ハックルベリー フィンの冒険』(1941) の冒頭部分 (上の (20) に相当) を見てみよう。以下 (22) に示す。

- (22) あなた方は、トム ソーヤーの冒険といふ本を読んだことがなければ、私のことを知らない。だがそれはどうでもいいことだ。その本はマーク トウェーン氏によつて書かれた。そして書いてあることは大體本當のことである。誇張したこともあるが、大體本當のことである。それは大したことではない。いつか嘘をついたことのないやうな人を、私はまだ見たことがない。例外はポリー伯母さんと、未亡人と、多分メイリーさん位なものだ。ポリー伯母さん——それはトムのポリー伯母さんだ——それからメイリーさん、それからダグラス未亡人は、皆その本の中に出て来る。それは、前にも言つたやうに、大體本當のことであるが、幾分誇張したところもある。

(p. 9)

次に、村岡花子 (訳) 『ハックルベリー・フィンの冒険』(1959) の同じ冒頭部分を引用する。

- (23) 諸君が『トム・ソーヤーの冒険』という本を読んだことがないなら、僕のことは知ってなさるまい。だが、そんなことはどうでもいい。その本はマーク・トウエンさんという人が書いたもので、大体、

ありのままのことを言っている。嘘のところもあるにはあるが、大部分はほんとうのことが書いてあるから、問題にしないでいい。僕の知っているかぎりではだれだってたまには嘘の一つや二つは吐くもの。もっとも、ポリー伯母さんと未亡人のメアリは別だけれども。ポリー伯母さんや——ポリー伯母さんというのはトムの伯母さんである——メアリやダグラス未亡人のことはみなその本に書いてあるし、その本は前にも言ったとおり、少しは嘘もまじっているが、あらかたはほんとうを言っている。(p. 9)

(22) の中村（訳）、(23) の村岡（訳）のどちらも話し言葉としては滑らかであり、ハックの語りの「雄弁さ」も感じ取ることができるのではない。また、原著においてハックはアメリカ英語の方言を使用しているが、日本語訳におけるハックは標準語で話している。文法や句読点の使用の「間違い」も、日本語の翻訳で間違いとして再現されていない。（この後に出てくるスペルの間違い“sivilize” (cf. “civilize” 「文明化する」) も同様に、中村（訳）では「人並みの人間に[する]」(p. 9)、村岡（訳）では「ちゃんとしつけをしてやる」(p. 9) となっている。）この他にも、例えば人称代名詞“I”と“You”（ここでは読者を指す）に着目してみると、中村（訳）では「私」「あなた方」、村岡（訳）では「僕」「諸君」とそれぞれ訳出されており、「浮浪児」にしては少しお行儀のいい印象を与える。

以下 (24) は那須 (1986) (村岡（訳）(1959) から27年後) による原文の注釈からとっているが、面白いことに、ハックはいわゆる<田舎ことば>を話している。<田舎ことば>とは、話者として田舎者が想定される「役割語」の一種であり²⁰、特定の地域の方言ではなく、「いかにも田舎くさい言葉に聞こえる表現」(金水 2003, pp. 56) が組み合わされている場合

20 「役割語」とは、特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）と心理的に結びつけられる特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）のことであり、金水（2003）によって提唱された。

が多い²¹。(24) に例を挙げる（該当部分に下線）。

- (24) a. [...] I couldn't stand it no longer (p. 9)
「おら, もう我慢でけんようになった」 (p. 2)
- b. [...] I don't take no stock in dead people (p. 10)
「おら, 死人にや興味なんか全くねえ」 (p. 2)
- c. [...], (and) wouldn't do no good (p. 10)
「なんの得にもならんじゃろ」 (p. 3)

まず、ハックは自身を指す一人称代名詞（“I”に相当）として「おら」を使用している。「オラ」は「現代では方言として、東北各地を中心に分布が見られ[...]」、「[...] <田舎ことば>の一人称として用いられることが多い」と言う（金水（編）2014, pp. 59-62）。また、(24a)の「デケン」は西日本的であり（佐賀のあたりか？）、(24b)の「ネー」は「(否定)ない」における[ai]が[e:]に変化した形であるが、これは東日本に限らず、岡山、広島、南九州あたりでも観察されと言う。(24c)の「(否定)ン」と「(断定)ジャ」はどちらも西日本的であるが、<田舎ことば>としても用いられる（金水（編）2014, pp. 214-215; p. 106）。同様に、西田実（訳）『ハックルベリー・フィンの冒険』（2014）においても、ハックの話し言葉に「田舎者っぱさ」が観察される。一人称代名詞として「オラ」が使用され、その他にも地域方言の語法的要素が観察される。以下（25）に冒頭部分の一部を引用する（該当部分に下線）。

21 日本の近代文学において<田舎ことば>が最初に観察された作品は、木下順二（著）の戯曲「夕鶴」（1949）である。木下（1958）は『『夕鶴』の中の男たちの言葉』に「[...]佐渡の方言をしんにしながら、しかしいろんな地方のなまりを取り入れて、[...]せりふを書いた」。「方言的なニュアンスやリズムや味わいを強く保ちながら、しかしどの地方の人々にも分る言葉というようなもの」をつくってみようという「試み」であったと言う（p. 284）。（木下は<田舎ことば>を「普遍的方言」と呼んでいる（田中（2011, p. 84）も参照のこと。）

- (25) a. おらのことは、『トム・ソーヤーの冒険』ていう本を読んだ人でなければ、だれも知るめえが、そんなことはかまわねえ。

(p. 17)

- b. さっきも言ったように、少しはうそ**ばち**もあるけんどな。

(ibid.)

- c. 後家のダグラスお婆さんは、おらを養子にして、教育してやるべえ^{かんげ}と考えた。(p. 18)

(25a) における「(知る)めえ」の「メー」は、(上の「(否定)ネー」と同様に)「(否定推量)まい」における [ai] が [e:] に変化した形と考えられ、(25b) における「ケンド」は逆接「けれど」に相当し、どちらも関東から九州の広域に渡り観察されるようである^{22 23}。また、(25c) の「ペー」は、「東日本の各地で、推量や勧誘などの意味を表す方言として用いられている」が、推量や勧誘などの意味がない場面でもく田舎ことば>として用いられると言う(金水(編) 2014, p. 163)。このように、那須(1986)や西田(2014)による「ハック英語」の日本語翻訳にはく田舎ことば>が投影されている。これは、原文のハックの語りに「標準的」ではないアメリカの方言(本稿セクション4.1を参照のこと)が使用されているためであろう。

それでは、約2年前に刊行された柴田元幸(訳)『ハックルベリー・フィンの冒けん』(2017)はどうか。同じ冒頭部分を見てみよう。

- (26) 「トム・ソーヤーの冒けん」てゆう本をよんでない人はおれのこ
と知らないわけだけど、それはべつにかまわない。あれはマーク・
トウェインさんてゆう人がつくった本で、まあだいたいホントの

22 (25a) における「メー」(cf. 「(否定推量)まい」)は、関東の一部(栃木・群馬・埼玉)、長野、九州の一部(福岡・大分)で使用が確認されている(平山(編) 1993)。

23 (25b) における「ケンド」(cf. 「(逆接)けれど」)は、関東の一部(埼玉・神奈川)、近畿の一部(滋賀・兵庫・奈良)、四国の一部(徳島・愛媛・高知)、九州の一部(福岡・大分)で使用が確認される(平山(編) 1992)。

ことが書いてある。ところどころこ・ち・うしたところもあるけど、だいたいホントのことが書いてある。べつにそれくらいなんでもない。だれだってどこかで、一どや二どはウソをつくものだから。まあポリーお婆さんとか、未ぼう人とか、それとメアリなんかはべつかもしれないけど。ポリーお婆さん、つまりトムのポリーお婆さん、あとメアリやダグラス未ぼう人のことも、みんなその本に書いてある。で、その本は、だいたいホントのことが書いてあるんだ。さっき言ったとおり、ところどころこ・ち・うもあるんだけど。(p. 10)

柴田（訳）におけるハックの言葉づかいは、彼の人物像（13歳から14歳ぐらいの「浮浪児」の少年）に合っており、また、彼の語りが雄弁であるという印象は損なわれずにいると思われる。だが、何よりも真っ先に受ける印象は、ひらがな表記の圧倒的な多さ、そして漢字の少なさであろう。それはタイトルの“Adventures”の訳語が「冒けん」と、「険」がひらがなで書かれているところにも表れている。それでは、この印象が本当に正しいのかどうかを確かめるべく、上で見た4つの翻訳版（中村（1941）、村岡（1959）、西田（2014）、柴田（2017））における上の引用部分（物語における最初のパラグラフ）の全体の文字数に対するひらがなと漢字の割合を算出することとする（文字数には、句読点や括弧、ダッシュも含める）。（ここに、大久保博（訳）『ハックルベリー・フィンの冒険』（1999）と土屋京子（訳）『ハックルベリー・フィンの冒険』（2014）の2作品も加える。）（表2）に結果を示す。

（表2）に示すように、6つの日本語翻訳版の中で、柴田（2017）におけるひらがな表記の割合が一番高く、同時に漢字の割合が一番低いことが分かる。（使用されている漢字の実数も9つである。）

それでは、上の引用部分の原文からいくつか語（句）を取り上げ、これらが（表2）で使用了6つの翻訳版において具体的にどのように訳出されているか、表記に注意しながら比較してみよう。（表3）に結果を示す。

(表2) ハックの語り (第1パラグラフ) におけるひらがな・漢字の割合の比較

	中村 (1941)	村岡 (1959)	大久保 (1999)	西田 (2014)	土屋 (2014)	柴田 (2017)
文字数 (全体)	295	314	381	308	319	327
文字数 (ひらがな)	177	207	263	217	222	237
ひらがなの割合	60.0%	65.9%	69.0%	70.5%	69.6%	72.5%
文字数 (漢字)	58	50	39	29	28	19
漢字の割合	19.7%	15.9%	10.2%	9.4%	8.8%	5.8%
(漢字の実数)	(33)	(28)	(23)	(16)	(16)	(9)

(表3) ハックの使用語彙の日本語訳と表記の比較

Huck (原文)	中村 (1941)	村岡 (1959)	大久保 (1999)	西田 (2014)	土屋 (2014)	柴田 (2017)
I, me	私	僕	おいら	おら	おいら	おれ
you	あなた方	諸君	みんな	--	みんな	--
know	知ら (ない)	知って	知ら (ねえ)	知る (めえ)	知ら (ねえ)	知ら (ない)
book	本	本	本	本	本	本
adventures	冒険	冒険	冒険	冒険	冒険	冒けん
read	讀ん (だ)	読ん (だ)	読ん (だ)	読ん (だ)	読ん (だ)	よんで
make (that book)	書い (た)	書い (た)	書い (た)	書い (た)	作った	つくった
mainly	大體	大体	だいたい	あらまし	だいたい	だいたい
true	本當	ほんとう	本当	本当	ほんと	ホント
That is nothing	大したこと ではない	問題にしく ない	大したこ とじゃねえ	どうってほ どなこと じゃねえ	どうってこ っちゃねえ	べつにそれ くらいなん でもない
lie	嘘	嘘	ウソ	うそ	嘘	ウソ
without	例外	別	別	べつ	(嘘言わねえ の～ぐらい)	べつ
Aunt (～)	伯母さん	伯母さん	おばさん/ おばあさん	おばさん	おばさん	おばさん
Widow (～)	未亡人	未亡人	後家	後家	未亡人	未ばう人
all	皆	みな	みんな	みんな	みんな	みんな
is told	出てくる	書いてある	書いてある		出てくる	書いてある
mostly	大體	あらかたは	だいたい	だいたい	ほとんど	だいたい
some	幾分	少しは	少しは	少しは	ちよいと	ところどころ
stretchers	誇張	嘘	ホラを吹い ているところ	うそっぱち	膨らました ところ	こ・ち・ょう

(表3)の英語の語(句)に対応する日本語訳をそれぞれ比較してみても、柴田(訳)における漢字の使用率が低いということは明らかであろう。(ハックの人物像に合わせて、語彙の難易度にも配慮がなされているのが分かる。)語彙の中でも「冒険」「未亡人」など、訳語が漢語であり、複数の漢字からなる場合、「冒けん」「未ぼう人」といったように、漢字の使用は最小限に抑えられている(漢字表記が残るのは1字目である場合が多い)²⁴。「こちょう」のように、ひらがなに付けられる傍点については後で述べることとする^{25 26}。

なぜ、柴田(訳)にはハックの話し言葉に漢字の使用が制限されているのであろうか。まず、(上にも述べたように)ハックはアメリカ英語の方言を話し、彼の英語には「標準的」ではない文法項目が見られるが、柴田氏は「日本のどこか特定の方言に当てはめ[て]」翻訳することはしなかったと言う(柴田 2018a, p. 7)。その点について、以下のように述べている。

方言を訳すときにどう訳したらよいかという問いに対する答えは1つではなくて、要するに「その人が方言をしゃべることによってどう

24 他にも「盗ぞく(←“robbers”)」「洞くつ(←“cave”)」「利し(←“interest”)」「不けつ(←“wasn’t clean”)」「場しょ(←“place”)」「人げん(←“somebody”)」「地めん(←“ground”)」などがある(全て1章より)。また、「上ひん(←“decent”)」「一時かん(←“an hour”)」「(1章より)のように、ひらがな表記の部分に傍点が付けられている場合もある。一方、数は少ないものの、「ま女(←“withches”)」「びょう人(←“sick folks”)」「(2章より)のように、1字目に現れるはずの漢字に代わってひらがな表記が使われている例もある(ひらがな表記の部分には傍点)。

25 他にも「りょうり(して)(←“cooked”)」「たる(←“barrel”)」「しゅうかん(←“practice”)」「はか(←“grave”)」「あくうん(←“bad luck”)」「ていてつ(←“horse-shoe”)」などがある(全て1章より)。

26 参考までに、間違ったスペルの語“sivilize”(cf. “civilize”「文明化する」)は、大久保(訳)では「狂育(教育)[する]」(p. 8)、西田(訳)では「教育[する]」(p. 8)、土屋(訳)では「ちゃんとした人間に直す」(p. 17)、柴田(訳)では「きちんとしつけてやる」(p. 11)と訳されている。

いう効果が生じているのか」を考える必要があると思います。例えば、その方言がユーモアにつながっているのであれば、別に方言で再現しなくても、そのユーモアを再現するように努めればいい。切実さ、切迫感がポイントであれば、それを伝えようとすればいい。または、搾取る側とされる側という構造が大事なのかもしれない。ならばそれをいつも念頭に置いて訳す。(pp. 7-8)

それでは、原文におけるハックの方言による語りによって生じる効果は何かと言うと、彼の英語の文法が標準的ではなく、スペルや句読点の間違いと合わせて、ハックがきちんと学校に行って勉強をしていないこと、そしてこの「間違い」ゆえに、彼の語りが雄弁であることが示されている。*Adventures of Huckleberry Finn* (1885) の日本語翻訳版は、柴田 (訳) より前にも複数出版されているが、柴田氏は「ハックがこんなに漢字が書けるはずがない」と少し違和感が残っていたと言う(柴田 2018a)。実際に、柴田氏は翻訳するにあたり、「誤りを誤りとして再現することは原則として試みず、あくまでハックが使いそうもない語彙を極力回避し、かつ「ハックにこの漢字が書けるか？」とつねに自問しながら訳し進めることをとおして、語りのリアルさの再現をめざした」(柴田 2017, p. 539)。全体的にひらがな表記が中心であるものの、ひらがなが並びすぎると読みにくくなるため傍点を付けたり、ハックに書けないような漢字であると思われたとしても、ひらがなにすると分かりにくい場合は「あえて漢字に[する]」といったような工夫がなされている。「意味、聴こえ方、漢字」の3点を意識しながら訳していき、「実際日本語にした時に読んでわかりやすい字づらになっているか」を考えたとする。「語り方、書き方のリアルさと読みやすさをどう噛み合わせるか」が鍵となっている(柴田 2018b)。

また、柴田 (訳) には、漢字で書くのが「一般的」であると思われる語に(ひらがなではなく) カタカナが使われている場合がある。以下 (27) に例を挙げる (該当部分に下線)。

- (27) a. だれに言われなくたって、これがものすごくエンギのわるいこと
 とで、あ・く・う・んがふりかかるんだってことはわかるから、おれは
 すっかりおびえてしまい、ブルブルふるえるせいで服がぬげちま
 いそうだった。(p. 15)
- b. だれもが団にち・ゆ・う・せいをつくし、ぜったいにヒミツをあかさ
 ないこと、もしだれかが団いんになにかしたら、そのだれかとそ
 の家ぞくをころせとめいじられた者はかならずそうしなきゃいけ
 なくて、[…]. (pp. 21-22)

(27a) では「エンギ (← “sign”)」(cf. 「縁起」)、(27b) では「ヒミツ (← “secrets”)」(cf. 「秘密」) がカタカナで表記されているが、柴田氏によると「大きな抽象的な言葉のときはカタカナにして」いるとのことである (柴田 2018a, p. 14)²⁷。その理由として、「原文では綴りが間違っていたりして、大きな懸念をやたらありがたがるような風潮を暗にからかっている——ハックがではなくトウエインが——ところがあると思うので」(ibid.) と述べている。

4.3 まとめ

このように、柴田 (訳) のハックの語りは主にひらがなで書かれ (ときに傍点が付けられる)、ハックが書けると思われる語には漢字、そして特定の語 (「大きな抽象的な言葉」) にはカタカナ表記と言ったように、文字システムの使い分けが見られる。また、言葉づかい自体もハックの人物像にふさわしく、音・意味・表記のどの点においても違和感を感じることなしにスムーズに読み進めていくことができる。また、ひらがな表記の多用

27 他の例としては、「ウソ (← “lie”)」 「カネ (← “money”)」 「アワレ (な) (← “poor”)」 「アタマ (← “head”)」 「タイクツ (← “dull”)」 「ツミ (ぶかい) (← “wicked”)」 「ユウレイ (← “ghost”)」 など (全て 1 章より) がある。漢語・和語による区別はない。

は、(ひらがなと初学者のイメージの結びつきにより) 単にハックの「無教養さ」に通じるだけではなく、ひらがなの“run-together”が与える印象は、彼の語りに勢いがあり、雄弁さを備えていることにも結びつけられるのではないか。

以下(表4)に、柴田(訳)『ハックル・ベリーフィンの冒けん』における変則的な文字表記の使用について結果をまとめる。

(表4) 柴田元幸(訳)『ハックル・ベリーフィンの冒けん』における
日本語の変則的な文字タイプの使用

SL：英語	TL：日本語				
使用する文字タイプ	使用する文字タイプ (デフォルト) → (変則的)		操作の対象となる語（句）の選択の基準	読者が受ける印象・効果／柴田氏が表現したかったことなど	備考
alphabets	漢字	ひらがな	ハックにとって漢字で書くのが難しいと思われる言葉	☞ハックが無教養であるということ ☞ハックの語りが雄弁であるということ	読者にとって読みにくい場合は傍点を付ける
		カタカナ	「大きな抽象的な」言葉	☞トウェインが原著で間違った綴りを使うことによって表現した大きな概念をありがたがる風潮に対応するからかいに対応	

ハックが話すアメリカの方言には、標準英語と異なっているため「間違い」とみなされる文法項目があり、またスペルや句読点の使用にも間違いが見られる。一方、柴田(訳)では、ハックの語りを日本の特定の方言に当てはめて翻訳することも、そういった「間違い」をそのまま間違いとして再現することも行っていない²⁸。原文における規範から外れた言葉づかいはハックがきちんと教育を受けていないことの表れであり、間違ったスペルの意図的な使用は当時の世の中の規範的なもの、「大きな概念」をありがたがる風潮に対するトウェインの揶揄を象徴的に表していると言う。

柴田（訳）では日本語の文字システムを巧みに使い分けることによって、これらの要素の等価の実現を試みた。（漢字ではなく）ひらがな・カタカナ表記の変則的な使用は一語一語に対して慎重に決定されているが、文全体として典型的な漢字仮名混じりで書かれているのではないところもまた、トウェインの規範的なものに対する揶揄に通じていると言える²⁹。

5 結びにかえて

本稿では、日本語と英語における文字システムの違いに着目し、文字タイプの操作による効果が二言語間の翻訳においてどのように生かされるのかについて考察した。日本語から英語への翻訳において、変則的な文字表記の使用にどう対応するのかという問題は大変興味深いのであるが、アルファベットの文字タイプ1つだけであっても等価の実現は（ある程度）可能であることが分かった。また、逆に英語から日本語への翻訳において、日本語には3つの文字タイプが存在するという特性を生かし、特定の語の表記に変則的な文字タイプを使用することによって、原著に見られるさまざまな要素を象徴的に表現しうることが分かった³⁰。今後も事例の分析を通し、文字タイプの変則的な使用の理解と実践につなげていきたい。

28 柴田氏は、「間違い」を間違いとして再現しなかった理由として、「読者から見て、原作者が意図的に盛り込んだ誤りなのか、単に訳者が間抜けなだけなのか判定が困難であり、つねに隔靴搔痒かっかそうようの感を免れないからだ」（柴田 2017, p. 538）と述べている。

また、英語のスペルの間違いへの対応として、例えば、日本語では漢字を意図的に書き間違えて表記する方法の可能性について、以下のように語っている。

この本ではこういうことをやろうとしているんだということを一貫して見せられれば、それもアリだと思います。例えば、「リングの皮をむく」と出てきたら、「皮」じゃなくて「川」になっているとか。でも、これが一冊の本の中で一箇所しかない、ミスプリじゃないとか、ワープロの誤変換だと思われるのが関の山なので。そういうことを系統的に方法としてやっているのだということを見れば可能だと思います。ただそれは相当、訳者の努力が出てしまって、うっとうしいと思う人のほうが多いかなと思います。

（柴田 2018a, p. 14）

29 *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) に登場する Jim (ジム) (「Miss Watson の奴隷。自分が南部へ売られる話を盗み聞き、逃亡。Huck と出会い、筏の旅、冒険を共にする黒人」(那須 1986, p. vii)) は、「ミズーリ黒人方言 (“the Missouri negro dialect”)」の話者である (Rasmussen 2014, p. 307)。以下 (i) は、ジムの発話の例とその日本語訳 (柴田 (訳)) である。

- (i) a. “Say—who is you? Whar is you? Dog my cats ef I didn’ hear sumfn. Well, I knows what I’s gwyne to do. I’s gwyne to set down here and listen tell I hears it agin.” (p. 13)
「よお--だれだ? どこだ? おっかしいなあ、たしかになにかきこえたんだが。よし、ひとつここにすわりこんで、もういっぺんきこえるまで、じっくり耳をすますぞ」(p. 18)
- b. “Yo’ ole father doan’ know, yit, what he’s a-gwyne to do. Sometimes he spec he’ll go’ way, en den agin he spec he’ll stay. De bes’ way is to res’ easy en let de ole man take his own way. Dey’s two angels hoverin’ roun’ ‘bout him. One uv’ em is white en shiny, en’ tother one is black. [...]” (pp. 25-26)
「あんたのおやじはまだ、じぶんがなにをするつもりか知らねえ。町から出ようとおもうときもあるけど、とどまろうとおもうときもある。ここはじっくりかまえて、むこうの好きにやらせるのがいい。おやじさんの上にはふたりの天使がうかんでる。ひとりとは白くてひかってて、もうひとりは黒い。[...]」(p. 38)

ジムが話す英語の方言には、非標準的な文法項目が多く含まれている。例えば、be 動詞は (主語の人称に関わらず) “is” を使い (e.g., “...who is you?” (cf. “...who are you?”), “...what I’s gwyne...” (cf. “...what I’m ”), “Dey’s ...” (cf. “They are”)), 主語が一人称単数の “I” であっても、動詞に 3 単現の {-s} を付ける (e.g., “I knows ...” (cf. “I know”)). また、発音も標準英語と異なり、その違いが綴りに表れている (「視覚方言 (“eye dialect”)」と呼ばれる) (山口 2007, p. 13))。例えば、“th” [ð] の発音が [d] として表れ (e.g., “den” (cf. “**then**”), “de” (cf. “**the**”), “dey” (cf. “**they**”)), 語頭の母音や語末の子音が脱落し (e.g., “ ‘way ” (cf. “away”), “ ‘round” (cf. “around”), “ ‘bout” (cf. “about”); “didn’ ” (cf. “didn’t”), “gwyne” (cf. “going”), “ole” (cf. “old”), “bes’ ” (cf. “best”), “yo’ ” (cf. “your”)), 異なる母音が見れる場合がある (e.g., “ef” (cf. “if”), “yit” (cf. “yet”), “uv” (cf. “of”)) (那須 (1986) を参照のこと)。

このように、ジムの英語には視覚方言が使われ、明らかに「ハック英語」との差別化が行われているが、日本語翻訳におけるジムの話し言葉はどうであろうか。「アメリカの奴隷解放以前の黒人奴隷の言葉」には「東北系のく田舎ことば」が充てられる」ことが多いが (金水 2003, p. 184)、柴田 (訳) のジムの話し言葉にはく田舎ことばの要素は見られず、実際に柴田 (2018b) は「ジムを定型的に田舎者化するのは避けたかった」と述べている。また、ジムの漢字の使用については、ハックの語りに出てくる語句がジムの会話でも出てくる場合、もしそれが漢字で書かれていればジムの会話でも漢字で書かれているし、ひらがなで書かれていればジムの会話でもひらがなで書かれているようである。

30 英語母語話者ではない登場人物による英語の話し言葉の日本語訳に、語尾の「(あり)ます」「です」だけがカタカナで表記されることがある。(i) は映画 *Charlie Chan's Courage* における中国系アメリカ人の探偵「チャーリー・チャン」の英語の台詞である(山口(2007, p. 14)に引用)。日本語訳は山口氏による(変則的なカタカナ表記の箇所には下線を引く)。

- (i) Mrs. Jordan: Charlie...I've asked so much of you already, but will you do one more great favor and take this to the desert?
Chan: When proper person is encountered, pearls will be delivered.
[...]
Chan: Many facts stated here suggest possibility of unknown danger in delivering pearls. Beg to request your valuable help in present matter.
Bob: Certainly. I'd be glad to.
Chan: Thank you so much. Blind man feels ahead with cane before proceeding.

(Seton I. Miller (Writer))

ジョーダン夫人: チャーリーさん、これまでもにも本当によくしていただいているので恐縮ですが、もうひとつだけ大変なお願い聞いていただけますかしら。これを砂漠に届けていただきたいんですけれど。

チャン: しかるべきの人遭遇の折、真珠届けられマス。
[中略]

チャン: ここに述べられた多くの事実から察しマス。真珠届けるに知られざる危険の可能性アリマス。本件にあなたの貴重な手助けをぜひお願いしマス。

ボブ: わかりました。喜んで。

チャン: ありがとうございますマス。盲人、杖を探らせ、歩を踏み出すデス。
(訳文は山口氏による; 山口(2007, pp. 14-15)に引用)

山口(2007)によると、チャンの英語にはビジン英語の特徴(冠詞の脱落や主語の省略など)が観察される一方で、“When proper person is encountered, pearls will be delivered”の文では「わざわざ受動態を重ねて、口語らしからぬ印象を醸し出して」いたり、“Blind man …”の文は格言めいていたり、「珍重な堅苦しさ」があると言う(p. 15)。

山口氏によるチャンの話し言葉の日本語訳には格助詞「が」「を」の省略などビジンの特徴が見られる一方で、「しかるべき」「知られざる」「貴重な」などの語句の使用から、堅苦しい雰囲気が保たれている。それでは、山口氏はなぜ「(アリ)マス」「デス」をカタカナで表記したのであろうか。カタカナ表記は話者として外国人のイメージと結びつくが、チェンと話しているジョーダン夫人やボブの英語は標準的であり、日本語訳も自然で流暢に話している印象を受ける。変則的なカタカナ表記の使用も見られない。山口氏は、チャンの話し言葉の日本語訳において「マス」とカナ書きにしたのは、英語原文から受けたどこかちぐはぐな印象を形にしたかったから」と言う(2019年11月26日私信)。

ビジン英語を喋るところと、しかつめらしい文体が同居する違和感をおそらくは)出したかったのですが、冠詞や主語が省略されているところについては、日本語に翻訳しても標準的な日本語とさして変わりません。また、「私、それ、知らないある」というように、格助詞をすべて取ってあからさまにビジンであることを明記するのも、チャンの硬い言い方とは違うのではないかと思います。そこで、徹底的にビジン語に翻訳しないまでも、ちぐはぐ感を出すためにビジンの要素を強調した。語尾の「ます」をカタカナで書いたのはそういう理由によるのだと思います。(山口治彦氏(2019年11月26日私信))

資料文献

- 木下順二 (1949) 「夕鶴」『婦人公論』 1月号. (再録: (1988) 『木下順二集 1』 pp. 1-42. 東京: 岩波書店.)
- 宮下奈都 (2015) 『羊と鋼の森』 東京: 文藝春秋.
- Miyashita, Natsu. (2019) *The Forest of Wool and Steel* (J. P. Gabriel, Trans.). London: Doubleday.
- 村上春樹 (1982) 『羊をめぐる冒険』 東京: 新潮社.
- 村上春樹 (1995) 「夜のくもざる」『村上朝日堂超短編小説 夜のくもざる』 pp. 103-107. 東京: 平凡社.
- 村上春樹 (2002) 『海辺のカフカ <上>』 東京: 新潮社.
- Murakami, Haruki. (2003) *A Wild Sheep* (Alfred Birnbaum, Trans.). London: Vintage. (First published in Great Britain in 2000 by The Harville Press)
- Murakami, Haruki. (2005) *Kafka on the Shore* (Philip Gabriel, Trans.). New York: Knopf.
- 村上春樹 (2009) 『1Q84 BOOK 1』 東京: 新潮社.
- 村上春樹 (2010) 『1Q84 BOOK 3』 東京: 新潮社.
- Murakami, Haruki. (2011) *1Q84* (Jay Rubin and Philip Gabriel, Trans.). New York: Knopf.
- 村上春樹 (2013) 『色彩を持たない多崎つくると、彼の巡礼の年』 東京: 文藝春秋.
- Murakami, Haruki. (2014) *Colorless Tsukuru Tazaki and His Years of Pilgrimage* (Philip Gabriel, Trans.). New York: Knopf.
- Smith, Gregory Blake. (2019) *The Maze at Windermere*. New York: Penguin Random House. (First published in the U.S. by Viking Penguin (2018)).
- トウェイン・マーク (1999) 『ハックルベリ・フィンの冒険』 (角川文庫) (大久保博 (訳)) 東京: 角川書店.

- トウェイン・マーク (2014) 『ハックルベリー・フィンの冒険 (上)』 (光文社古典新訳文庫) (土屋京子 (訳)) 東京: 光文社.
- トウェイン・マーク (2014) 『ハックルベリー・フィンの冒険 (上)』 (ワイド岩波文庫) (西田実 (訳)) 東京: 岩波書店.
- トウェイン・マーク (2017) 『ハックルベリー・フィンの冒けん』 (柴田元幸 (訳)) 東京: 研究社.
- トウェイン・マーク (1941) 『ハックルベリイ フィンの冒険 上』 (岩波文庫) (中村爲治 (訳)) 東京: 岩波書店.
- トウエン・マーク (1959) 『ハックルベリイ・フィンの冒険』 (新潮文庫) (村岡花子 (訳)) 東京: 新潮社.
- Twain, Mark. (2014) *Adventures of Huckleberry Finn*. New York: Penguin. (First published in the U.S. by Charles L. Webster and Co. (1885)).
- U.S. Government Publishing Office. (1787) *Constitution of the United States*. Retrieved from <https://www.govinfo.gov/content/pkg/GPO-CONAN-1992/pdf/GPO-CONAN-1992-6.pdf>

参考文献

- Dobrovolsky, M. and O'Grady, W. (2005) "Writing and Language."
In W. O'Grady, J. Archibald, M. Aronoff, and J. Rees-Miller (eds.)
(pp. 532-553), *Contemporary Linguistics: An Introduction*, fifth
edition. Boston: Bedford/St. Martins.
- Fukuda, S. E. and Fukuda, S. (1999) "The Operation of Rendaku
in the Japanese Specifically Language-Impaired: A Preliminary
Investigation," *Folia Phoniatrica et Logopaedica* 51: 36-54.
- 後藤和彦 (2010) 「【マーク・トウェインの著作】序説」 亀井俊介 (監修) 『マ
ーク・トウェイン文学／文化事典』 pp. 44-55. 東京: 彩流社.
- 橋本竜作・岩田みちる・下條暁司・柳生一自・室橋春光 (2016) 「特異的

言語障害を伴う発達性ディスレクシアの1例』『高次脳機能研究』36
(3) : 98-105.

平山輝男 (編) (1992) 『現代日本語方言大辞典 3』東京: 明治書院.

平山輝男 (編) (1993) 『現代日本語方言大辞典 6』東京: 明治書院.

Hoyt, A. (2011, October 24) “How Haruki Murakami’s ‘1Q84’ was translated into English,” *The Atlantic*. Retrieved from <https://www.theatlantic.com/entertainment/archive/2011/10/how-haruki-murakamis-1q84-was-translated-into-english/247093/>

井川眞砂 (2010) 「[小説] *Adventures of Huckleberry Finn* (1885) 『ハックルベリー・フィンの冒険』 亀井俊介 (監修) 『マーク・トウェイン文学／文化事典』 pp. 57-61. 東京: 彩流社.

木下順二 (1958) 「『夕鶴』のせりふ」『新劇通信』. (再録: (1988) 『木下順二集 1』 pp. 284-285. 東京: 岩波書店.)

金水敏 (2003) 『ヴァーチャル 日本語役割語の謎』東京: 岩波書店

金水敏 (編) (2014) 『<役割語>小辞典』東京: 研究社.

金水敏 (2016) 「役割語とキャラクター言語」金水敏 (編) 『役割語・キャラクター言語研究 国際ワークショップ 2015』5-13.

金水敏 (2018) 「小説における仮名の一用法と翻訳—村上春樹作品を例に—」『ことばと文字』10: 83-89.

衣畑智秀・楊昌洙 (2007) 「役割語としての「軍隊語」の成立」金水敏 (編) 『役割語研究の地平』 pp. 179-192. 東京: くろしお出版.

牧野成一 (2018) 『日本語を翻訳すること—失われるもの、残るもの』(中公新書). 東京: 中央公論新社.

那須頼雅 (1986) 「主な登場人物」『ハックルベリー・フィンの冒険』 pp. vii-viii. 東京: 開文社.

西田隆政 (2018) 「[属性表現] 再考」定延利之 (編) 『「キャラ」概念の広がり』 pp. 84-97. 東京: 三省堂.

岡崎友子・南侑里 (2011) 「役割語としての「幼児語」とその周辺」金水敏 (編)

- 『役割語研究の展開』 pp. 195-212. 東京: くろしお出版.
- Rasmussen, R. K. (2014) “Notes.” In M. Twain (pp. 307-345), *Adventures of Huckleberry Finn*. New York: Penguin.
- Robinson, A. (2007) *The Story of Writing: Alphabet, Hieroglyphs & Pictograms*, second edition. New York: Thames & Hudson.
- Rogers, H. (2005) *Writing Systems: A Linguistic Approach*. Malden, MA, USA: Blackwell.
- 瀬戸賢一・投野由紀夫 (編) (2012) 『プログレッシブ英和辞典 第5版』 東京: 小学館.
- 柴田元幸 (2017) 「解説」『ハックルベリー・フィンの冒けん』 pp. 531-552. 東京: 研究社.
- 柴田元幸 (2018a) 「柴田元幸トークイベント『ハックルベリー・フィンの冒けん』と翻訳」
https://www.kenkyusha.co.jp/uploads/HuckleberryFinn/HuckleberryFinn_ABC_0124_2018.pdf (2019年4月5日)
- 柴田元幸 (2018b) 「柴田元幸氏インタビュー 小説の良さを伝える翻訳『ハックルベリー・フィンの冒けん』 (研究社) 刊行を機に」
<https://dokushojin.com/article.html?i=2849> (2019年10月23日)
- 柴田元幸 (2019) 『『ハックルベリー・フィンの冒険』をめぐる冒けん』 東京: 研究社.
- Sproat, R. (2000) *A Contemporary Theory of Writing Systems*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- 住田哲郎 (2018) 「『1Q84』『ふかえり』の魅惑を創出する日本語の特性—英語・韓国語・華語との比較を通じて—」 曾秋桂 (編) 『村上春樹における魅惑』 pp. 305-333. 淡江大學出版中心.
- 田中春美 (編) (1988) 『現代言語学辞典』 東京: 成美堂.
- 田中ゆかり (2011) 『「方言コスプレ」の時代 ニセ関西弁から龍馬語まで』 東京: 岩波書店.

- Vance, T. (2005) *TRAD101: Writing Systems of the World, lecture 15 notes*. University of Arizona, Tucson, U.S.
- 山木戸浩子 (2018) 「日本語の文学作品における言語変種の英語翻訳—村上春樹 (著)『海辺のカフカ』ナカタさんの話し言葉から考える—」『通訳翻訳研究への招待』 19: 1-21.
- 山木戸浩子 (2019) 「ナカタさん (『海辺のカフカ』) の変わった話し方は英語でどのように翻訳されるのか」『村上春樹翻訳調査プロジェクト (2)』 18-50. 私家版. 大阪大学大学院文学研究科.
- 山口治彦 (2007) 「役割語の個別性と普遍性 一日英の対照を通して—」金水敏 (編)『役割語研究の地平』 pp. 9-25. 東京: くろしお出版.
- 洋泉社編集部 (編) (2013)『増補改訂版 村上春樹 全小説ガイドブック』 東京: 洋泉社.